

ダイバーシティ推進室が行く！

— 教育学部学校教育教員養成課程国語教室宮崎研究室編 —

令和5年度女性エンパワーメント支援制度を利用された、宮崎尚子先生と研究室の学生さんへのインタビューです。

普段から積極的にダイバーシティな研究に取り組み、また、ダイバーシティ溢れる環境に飛び込んで活躍されている皆さんにマイクを向けました。



宮崎先生

西牧さん

横山さん

・横山黎さん：4年生（インタビュー当時）

卒業研究の「桃太郎」について物語るイベント「BOOKTALKLIVE “桃太郎”」を開催。自身での著作本で全国大学ビブリオバトルに挑戦するなど、積極的に活動しています。

[トークライブの様子【4年次：横山さん】](#) | [茨城大学 教育学部 国語教室 \(ibaraki.ac.jp\)](#)

・西牧花さん：3年生（インタビュー当時）

上海で行われた国際芥川龍之介学会やフィールドワークにiOPとして参加。その成果を茨城県国語教育学会国際シンポジウムで発表。2023年度iOP-AWARD優秀賞受賞。

[茨城国語教育学会：国際シンポ](#) | [茨城大学 教育学部 国語教室 \(ibaraki.ac.jp\)](#)

*インタビューは令和6年3月に実施しました。
聞き手：ダイバーシティ推進室員（會田・渡邊・網代）

宮崎研究室はどんな研究室ですか

西牧さん；自分の興味があることをとことん追求できる研究室だなと思います。

ゼミでは、ひとり一つの作品を担当して研究し発表をしています。発表の時には、先生から講評と一緒に次に繋がるアドバイスを頂けずし、ゼミ生同士の質疑応答も活発で、鋭い質問や思いがけない問いが来ることもあります。いい意味で先生や他のゼミ生からのプレッシャーがあり、刺激になって研究を頑張ろうという気持ちになります。

横山さん；週に一度ゼミの皆で集まりますが、先生に進捗を報告するだけでなく、皆、研究について興味を持ったことを

先生にどんどん聞いて、アドバイスをいただいて、そこから話がまた展開して、ゼミ生それぞれの主体性・自主性を尊重し、サポートしてくれる研究室だなと思います。

宮崎先生；ゼミの中では「必ず一回は自分の言葉で語ってね」と話しています。

学生達は皆とても優秀なので、調べ学習についてはレベルが高いとは思いますが、そこから先、自分の考察にどう繋げるかというところをゼミの中で煮詰めてほしいなと思っています。

日本文学は長く研究されているものなので、既に色々と考察されていますが、「もう自分にできることはない」と諦めないで「令和の時代に生きているあなたたちにしか導くことができないこと」をつきつめて、自分自身が一番納得するゴールを見つけて欲しいです。

横山さんは「芥川龍之介研究——『桃太郎』を中心に」という卒業研究に取り組んでいらっしゃいましたね。どうしてこの研究を選んだのですか？

横山さん；学部2年生の時に指導教員の宮崎先生の授業のなかで紹介された芥川龍之介の『桃太郎』に興味を持ったことがきっかけです。この頃から論文や書籍を読み、アウトプットを兼ねてブログを書いていた。学部4年生になった時に2年前の取りこぼしを突き詰めたいと思い、このテーマで研究しました。
桃太郎は時代とともに話の内容が変遷しています。特に明治時代以降は政治的な意図が反映されているんです。「悪」である鬼ヶ島に「英雄」として鬼を倒しに行く桃太郎、という話がメジャーであり、受け継がれているイメージがありますが、現代では、桃太郎が鬼と仲良く共存する話や、桃太郎が鬼に育てられ、「どうして自分には角が生えてないのか」と悩み、「それはそれでみんな違っていいのではないか」ということを伝える話もあります。そういったところから、今の時代では多様性や共生を実現していく姿が求められていることを推察できます。

同じ物語が、時代と受け取り手の違いによって違う内容になっていくんですね。

宮崎先生；桃太郎が教科書に掲載されていた話もありますよね。

横山さん；もともと明治時代は強い国家作りのために教育に力を入れていました。その際に桃太郎を掲載した教科書が作られており、桃太郎が「勇敢で、強く、たくましい」ヒーローとして描かれ、全国の子供たちに影響を与えました。しかし、戦後、その桃太郎は戦争や過度なナショナリズムを煽動するものとして教科書から削除されました。でも、私はどの時代の桃太郎も教育的価値があるものだと思っています。
 (作家でもある横山さん)

将来的には“今”の桃太郎をもっと世に広めてアップロードしていきたいと考えています。
 新しく桃太郎の本を作って、教科書に掲載されるといいなと思います。

宮崎先生；どういう視点でどのようなことを盛り込んで物語にするか、また、教科書にしたいということで教育的効果等の視点も持てるところが教育学部出身ならではのところだと思います。



横山さんがどんな「桃太郎」を創られるのか、楽しみです。「桃太郎」をテーマにトークライブもされたということですが、参加されていた西牧さん、いかがでしたか。

西牧さん；トークライブでは、お子さんからお年寄りまで聞いているということで、皆が理解できるように、とてもわかりやすく説明していたのが印象的でした。

宮崎先生；教育学部の学生達は、総じてこういった「伝える」能力に長けているのかなと思います。

横山さん；教育学部の授業や教育実習を通じて、「伝える」能力が鍛えられたのかもしれませんが、トークライブの時にも子供たちがすごく良く話を聞いてくれて、しっかり理解してくれているのもわかって、嬉しかったですね。こんな感じでやればいいのだと自信になりました。

研究が教育に繋がっていく瞬間ですね。



西牧さんは、昨年10月に上海で行われた国際芥川龍之介学会が主催する学会やフィールドワークに参加し、iOP-AWARDでは見事優秀賞を受賞されましたね。学会に参加してみようと思ったきっかけを教えてください。

西牧さん; 宮崎先生の授業で芥川の学会が上海で開催されることを知りました。芥川に興味があり、また、学生時代のうちに旅行ではない形で海外に行きたいと思っていたので参加しました。中国語中心でのコミュニケーションということで、初めはとても緊張しましたが、中国の方が一生懸命おもてなししてくれたり「はなちゃん！はなちゃん！」と名前を呼んでくれ、たくさん助けていただけだったので、無事楽しく弾丸スケジュールをこなすことができました。友人と話すのは安心感がありますが、勇気を出して新しい場所へ行って、様々な人と話すということは大事なことだと思いました。

その後、得たことを様々な場所で発信していらっしゃいますが、そのあたりはどのようにして進めたのですか。先生のアドバイスがあつてでしょうか。

宮崎先生; やりっぱなしは後で振り返った時に後悔と思うので、学生達にはちゃんと形にするよう伝えています。また、まとめる過程の中で自分の考えや研究の内容が更に醸成されていくと思います。

第18回国際芥川龍之介学会ISAS上海大会



西牧さん; iOPアワードや茨城県の国語教育学会でも発表することになり、特に学会では専門の方が沢山いらっしゃるので緊張感がありました。芥川が上海を視察した際に書いた『上海遊記』という紀行文があり、私が上海に行った際は先生方やガイドさんの話を聞いて「そうなんだ」と思うだけでしたが、日本に戻って『上海遊記』を読み返していくうちにまた新たな発見がありました。この経験からアウトプットの機会は大事だと思いました。宮崎先生はもちろんですが、国語教室の他の先生方にもアドバイスをいただいたり、発表時間に話をおさめられるようゼミの中で何度も練習したりしました。

宮崎先生; 国語教室のいいところは、全ての先生方がそれぞれの専門的見地から助けてくださるところだと思います。教員間で他の研究室の学生のことも含めて把握しているので、「〇〇先生に確認しておいで！」と安心して送り出しています。この環境で、発表の準備を手伝ってくれるゼミ生はもちろん、発表を聞く学生からも様々ないい反応が出ています。何もなくても大学の4年間は過ごせてしまいますが、何かしている同年代の学生がいるのを知ることは、とてもいい刺激になっていると思います。



西牧さん; 私も2年生までは教育学部で定められた授業を淡々と受けていく感じでしたが、3年生になって色々な活動をして、自分が学生時代に頑張ったこととして胸を張って言えることができたというのが大きな収穫だったと思います。

皆さんの研究から、研究室や体験から、様々なダイバーシティを感じますね。

西牧さん; 芥川が上海を訪れた際、章炳麟という人物に出会うのですが、章炳麟は「桃太郎が好きな日本人が嫌いだ」という話をしたそうです。章炳麟は鬼を「悪」と決めつけて攻撃するという桃太郎の精神を推している日本人にプロパガンダ的な恐怖を感じ、その危険性にいち早く気づきました。芥川の桃太郎が生まれた背景には章炳麟の考え方も多大な影響を与えたのではないかと思います。

横山さん; 芥川の記事でも、この言葉に衝撃を受けたこと、その刺激を受けて自身の作品である桃太郎に繋がる思想が生まれたことが書いてあり、そういったところから芥川の桃太郎が作られたのだなと感じています。

宮崎先生; 「1つの視点、1つの正義」だけではなく別の見方もあるということが多様性に繋がると考えています。他の日本文学作品でもいくつかの正義、いくつかの真理が共存するということはあって、いわゆる「ラショーモン効果」に繋がるものです。芥川は、外国作品も含め、様々なところから影響を受けているのが顕著な特徴なんです。日本の視点だけでなく世界文学としての日本文学というところを意識していたのだと思います。まさに「多様性」ですが、芥川が生きていた時代には早かったのかと思えるところを今の時代に学生達がきちんと掘り起こして研究しているということが心強いなと思います。

日本文学というと日本の中だけのものと感じてしまいがちですが、外国からの影響も強く受けていて、また外国にも影響を与えているんですね。

宮崎先生; 国際シンポジウムで講演くださった魯迅の研究家でもある鄒波先生が母国語文学と外国語文学は「世界を知る窓になり自分を知る鏡となる存在」とおっしゃっていました。魯迅と芥川・漱石は相互に影響しあっていて、その後の文学者達にも影響を強く与えています。

茨城大学がダイバーシティをより推進していくためにはどのような取組みをしていくといいと思いますか。

横山さん; 私自身は興味を持った内容のイベントに積極的に参加するようにしていますが、そうではない学生もいると思います。学内外で行われているイベントや行事を通じて様々な人とコミュニケーションを取ることで、多様性に触れることが出来るのではないのでしょうか。

西牧さん; キャンパスエイドという活動をする中でLGBTQの知識が足りないと感じる場面がありました。授業の中でもLGBTQ+や外国にルーツを持つ子供たちの内容に触れますが、これからの時代はより増加していくと思うので、授業等でさらに詳しく触れていただくと教員を目指す身としてもとても助かります。また施設面では、足の不自由な方も移動できるようにエレベーターを設置したり、性別問わず使用しやすいトイレがあったりすると、より充実するのではないかと思います。実は、私たちの研究室のある教育学部D棟はエレベーターがなく、トイレもとても古くてあまり使用しやすいトイレとは言えません。ここもあわせてご検討いただけるとありがたいです。

ソフト(イベント関係)の面でもハード(施設)の面でも皆さんをサポートできるようダイバーシティ推進室も努力してまいります。貴重なお話をありがとうございました。

